

エリゼ・ルクリュの地理学と アナキズムの思想

野澤 秀樹*

Hideki NOZAWA

Anarchism and Geography in *Elisée Reclus*

1. はじめに一研究史の見直しと研究課題

筆者はおおよそ20年まえ、エリゼ・ルクリュの地理学について、かれの地理学作品の代表作である三部作一『大地』(全2巻)(1868-9)、『新世界地理』(全19巻)(1876-94)、『人間と大地』(全6巻)(1905-8)を中心として、その体系と思想を紹介したことがある(野澤, 1986a)。またエリゼ・ルクリュの地理学思想の根底にある「自然観」を探ったことがあった(NOZAWA, 1986; 野澤, 1986b)。これらの研究において、筆者はエリゼ・ルクリュの社会思想(アナキズム)を脇に置いて考察を進めてきたのであったが、すでにかれの地理学思想にアナキズムの思想を予見させるものがあつた。

2005年はエリゼ・ルクリュ没後100年にあたり、フランスで2つのシンポジウムが開かれた¹⁾。それを好機ととらえ、先に課題として残されていたエリゼ・ルクリュの「地理学とアナキズム」について検討することとした。さきの拙稿の簡単な研究史においてふれたように、1970年代、当時の制度的な地理学、主に「実証主義地理学」に対し、リリヴァント relevant な、ラディカルな地理学が主張された。そうした地理学批判の中でエリゼ・ルクリュとその地理学がとりあげられたのであつた。G. ダンバーによる優れたエリゼ・ルクリュについての地理学史的研究を得たのもその頃のことであつた(Dunbar, 1978)。

ところで、このような地理学にけるエリゼ・ルク

リュ研究が行われていた頃、すでにエリゼ・ルクリュの本格的な社会思想史的研究が着手されていたのである²⁾。政治学を専攻するマリー・フレミング Marie Fleming (1979)の研究は、アナキズムの理論的指導者としてのエリゼ・ルクリュについて、その思想の形成と特徴を主題とするものであつた³⁾。それは、エリゼ・ルクリュのアナキズム文献を猟渉し、書簡集を活用しつつ、さらに関連した各地の警察資料を探索、収集して利用したエリゼ・ルクリュのアナキズム理論・運動の優れた研究書(学位論文)である。この研究は1970年代、すでにマルクス主義や社会主義圏の行き詰まりといった世界的な政治・経済的な状況を反映していたのであろう。

また、自然環境の破壊や都市に代表される社会環境の悪化など地球環境の状況は、日増しに深刻な事態に立ち至っている。近年アメリカの哲学者J.クラークらは、エリゼ・ルクリュのラディカルな社会思想に注目し、とくにエリゼ・ルクリュの思想におけるエコロジカルな、倫理的な視点について哲学的検討を加え、その現代的意義を再評価している(Clark, 1996; Clark & Martin, 2004)。2005年に開かれた2つのシンポジウムの報告書はまだ出されていないが、さきの拙稿でも紹介した Hérodote は、再度エリゼ・ルクリュを特集している(Hérodote, *Elisée Reclus, 2^e trimestre*, 2005)。人間的魅力にあふれたエリゼ・ルクリュについて、これまでも多くの伝記的研究が書かれてきたが(文献目録2)参照)、

* 九州大学 名誉教授

その後もフランス人著者によって大部の著書が著わされている (Sarrazin, 1985; Gonot, 1996; Chardak, 1997)。

こうした研究状況を踏まえて本稿の研究目的・課題を述べておこう。筆者は、不明にして上述のフレミングの研究にふれる以前の、エリゼ・ルクリュのアナーキズム関連の知識については、まことに浅薄なものであった。当時の筆者のアナーキズムに対する関心は、エリゼ・ルクリュのアナーキズム思想そのものを問題にすることより、むしろエリゼ・ルクリュも含め、クロボトキン、メチェニコフなど地理学者がアナーキストであることへの関心、すなわち「地理学とアナーキズム」との関連にあった。その問題は後の課題とし、ここではルクリュの場合について検討したい。エリゼ・ルクリュの地理学については、不十分なところ、訂正すべきところもあるが、一応前稿で検討をすませているので、本稿ではエリゼ・ルクリュのアナーキズムの思想を取り上げ、それと地理学との結びつきを検討してみたいと思う。

エリゼ・ルクリュのアナーキズムと地理学の関係については、上述のフレミングやクラークらの著書においても、社会思想的、あるいは政治思想的考察の中で取り上げられている。本稿では、とくに地理(学)思想の側から、エリゼ・ルクリュのアナーキズム思想との関連について検討してみたいと考える。エリゼ・ルクリュのアナーキズム思想を検討する際のエリゼ・ルクリュ自身のテキストについて簡単に触れておきたい。エリゼ・ルクリュのアナーキズムプロパーの著書は、新聞・雑誌の論考や講演などをまとめ、晩年に当たる 1898 年に出版された単行本『進化・革命・アナーキズムの理想 (L'évolution, la révolution et l'idéal anarchique)』の一冊のみである。そのほか、アナーキズム関係の新聞や雑誌、他のアナーキストの著書に書いた序文等が重要な資料となろう。エリゼ・ルクリュの思想を知る資料として、これまで多くの伝記、思想史の研究書でつかわれてきたのが (Paul Reclus, 1964; Hélène Sarrazin, 1985; Roger Gonot, 1996; Henriette Chardak, 1996; 石川三四郎, 1948)、書簡集 3 巻である (Reclus, 1911-25)。こうした基本資料を下に、フレミングをはじめとするルクリュ研究の成果によりながら、まずエリゼ・ルクリュのアナーキズム思想の形成に

ついて検討を加える。その際エリゼ・ルクリュがアナーキズム思想を受容し、傾倒していく上で背景となったと考えられる、かれを取り巻く環境にも注意をはらいたいと思う。そしてエリゼ・ルクリュのすでに明らかにした地理学の思想とアナーキズムのそれとを根底において結び付けているものは何かを探ることにしたい。

2. エリゼ・ルクリュにおけるアナーキズム思想の萌芽—1851 年のエッセー

2.1. 生い立ち—一神 (キリスト教) と向き合う

エリゼ・ルクリュがアナーキズム思想に向かっていく背景として、これまでのルクリュの伝記的研究 (Sarrazin, 1985; Chardak, 1997 など) や思想史的研究 (Fleming, 1979, 1988; Clark & Martin, 2004 など) において、プロテスタント^{バプティスト}牧師である父親ジャック・ルクリュの厳しい思想とその実践が大きく影響したことが指摘されている。キリスト教との対決がある意味でかれをアナーキズムに導いていったと見ることもできるかも知れない。エリゼが、父親の存在を重い抑圧と意識したとすれば、そこからの解放、かれのいう自由の獲得の自己決定がそこにはあったといえるであろう (Fleming, 1988)。

ジャック・ルクリュ (1796-1882) は、長老会議の長 (president du Consistoire) への推薦を受けず、古いカルヴィニズムのスタイルの生活を望み、決して豊かとはいえないフランスの南西部ドルドニュ地方のサント・フォワ Sainte-Foy からさらに貧しいピレネー山麓のカステタルブ Castétarbes やオルテツ Orthez に移り住み、貧しい農民とともにあろうとしたのである (Fleming, 1988, 28)。この父親の制度化された宗教に対する拒否と自己の意識に忠実であろうした姿は、のちのエリゼに映し出されることになる。甥のポール・ルクリュは、エリゼでの伝記の中で、父親ジャック・ルクリュのアナーキスト性を指摘している (Reclus, Paul, 1964, 17)。

エリゼは 1842 年 13 歳のとき、姉、兄も学んだこともあるドイツ・ライン地方のノイヴィエド (Neuwied) のモラヴィア兄弟の開いた学校に送られる。かれはここでキリスト教の兄弟愛

(brotherhood)とはいかなるものかを学ぶとともに、国籍、貧富などさまざまな差別を体験する。そこに2年間滞在した後サント・フォワに戻り、プロテスタントの学校で学び、1848年にバカロレア資格を取得している (Reclus, Paul, 1964; Fleming, 1988, 1章の注13)。

1848年から翌年まで、兄エリーとともにモンターバン Montauban の神学大学で神学を学んでいる。ルクリュ兄弟は、モンターバン神学大学の知的刺激の欠如に不満を持つ一方、社会的、政治的問題に眼に向けてようになっていった (Fleming, 1988, 33)。

エリゼは、1849年の秋に再びドイツ・ノイヴィエドに赴き、およそ1年間復習教師としてモラヴィア学校に滞在した後、自から学ぶため、当時ヨーロッパの知の一大中心をなしていたベルリンに赴き、ベルリン大学で多くの講義を聴講している。その中でエリゼは、カール・リッターの地理学に出会い、その講義にかれの思い (後に具体的に明らかになっていく、この大地、地球が統一された全体であるという観念) を説明してくれる学問と自分のこれからのあり方を見出すのである (Reclus, 1911, I, 37)。ベルリン滞在は、わずかに半年に過ぎないが (1851年冬学期)、その間エリゼは重要な決定をしている。一度は心に決めていた聖職者の道を捨てる決心をする (Reclus, 1925, III, 1-5)。エリゼは、これまで苦悶し続けてきたキリスト教からきっぱりとはなれ、ストラスブルで神学の勉強を続けていたエリーを訪ね、そろって徒歩と野宿をしながらフランスを横断、かつて神学を志したモンターバンに立ち寄り、サント・フォワに戻った⁴⁾。これまでの彼の考えをまとめたエッセイ (かれの最初のアナキズム宣言といわれる) が書かれたのは、このモンターバン滞在のときであった (Reclus, Paul, 1964; Fleming, 1988, 注1章21, 200-1)。

2.2. 「世界における自由の発展」(1851)

このエッセイは、エリゼ・ルクリュの晩年、妹ルイズによって発見されたもので、それを見たエリゼが「モンターバン、1951」と書き入れたと伝えられる (Fleming, 1979, 36-42.; 1988, 34-38. なお、この文献については、Fleming, 1979, 1章の注、21、43参照)。このエッセイが書かれたのが、エリゼがい

うように、1951年のモンターバンにおいてであるとすれば、上述したように、それはかれがノイヴィエドをへて、ベルリン滞在中に母への手紙で聖職者の道をきっぱりと否定したことを告げた後のことであり、当時のかれの気持ちの「自己説明」(self-clarification, Fleming, 1979, 36)であったといえる。そしてこのエッセイは、弱冠21歳という若い時期に書かれたかれのプログラムであり、以後かれがアナキズム思想を理論化してゆく基礎となるものであった (Fleming, 1979, 36; 1988, 34)。のちのエリゼ・ルクリュのアナキズム思想において重要となる基本概念を、やや長くなるが当該箇所から直接見ておくことにしよう (資料は、Reclus, Paul, 1964, 50-54. 下線は引用者)。

「これほど多く人間対人間の争いを引き起こし、いまでは世界を二分するほどの^{イデオ}理念とは何か。それが自由の、完全に絶対的な自由の理念である。…しかしそれに平行して発展して行くもうひとつ別の理念、愛の理念がある。とりわけ各個人にとって自由とは一つの目的であるが、それは愛のため、普遍的な友愛のための手段、効果的で、強力な手段にすぎないのだ。というのは自由な人間だけが、下心なく自由な兄弟を胸に抱きしめ“君が好きだ”ということができる。」(50) …

「…各民族 (国民) はそれぞれを王の後見から解放するだけでは十分ではない。さらに他民族の覇権から民族を自由にする必要がある。友好的なひとたちではあるけれども、かれらを敵としている境界、国境を消滅させねばならない。

…共和国はもうほとんど使命を終えた事実だ。…いまやわれわれの叫びは、“世界国家万歳”である。…いまや世界には未来の人と過去の人しかおらず、この広大な二つの部分は各々、あらゆる国で人種や言葉の違いなく追及される巨大な連合 fédération gigantesque を形成する」(52)。…

「こうして要約すると、ここの国家におけるわれわれの政治目的、それは貴族的な特権の破棄であり、全大地におけるひとびとの融合である。われわれの運命、それは理想的な完全状態に到達することであり、そこでは諸民族はもはや政府、あるいは他民族の庇護の下にある必要はないのである。それは政府の不在であり、秩序の最高の表現であるアナルシーである。」(53)。…

「社会主義が完全な表現に達するためには、(また)それが現実に社会の人間的理想であるためには、社会主義が、個人の権利と同時にすべての人の権利を守るものでなければならないし、(また) 人間的結合 association humaine の各構成員がその手段と能力に応じてその兄

弟たちの集団に何ら邪魔立てされることなく、自由に発展するのだからなければならない。同時に全員の幸福が各個人の労働から得られるのだからなければならない。」(53)。

このエッセーは、稚拙なところも見られないわけではないが、若者らしい、無垢な心から発したユートピアの世界を描いている。自由、愛、とくに兄弟愛、国境の消滅、連合、そして秩序の最高の表現としてのアナルシー（アナーキー）といった、エリゼがこれから進んでゆくアナーキズムの基本的概念が現れている。このエッセーを書いた後、サント・フォワに戻ったルクリュ兄弟は、パリからのニュースで、ルイ・ナポレオン（のちのナポレオン3世）が、クーデターを起こし、帝政への道を開いたことを知った。すでに共和主義者であったかれらは、それに強く反発し、市庁舎を占拠し、抵抗を市民に呼びかけるが失敗する。この事件での逮捕を恐れたかれらは、イギリスに亡命することになった。こうしてエリゼ・ルクリュの5年以上におよぶ海外亡命の旅が始まるのである（野澤、1986a, b）。

3. M. バクーニンとの出会いと『平和自由同盟』ベルン大会—1850年代末からパリ・コミューンまで

3.1. 海外亡命旅行・帰国後のパリでの生活—パリ・コミューンまで

5年を超える海外亡命生活は、19世紀フランス最大の地理学者といわれるエリゼ・ルクリュを育て上げる機会となったことは疑いない。それはまた根底においてアナーキズム思想につながるものであった。自然の中の生活と自然の観察、それはかれに大地が「自然の統一」と「自然の法則」に従っていることの認識を与え、また各地で遭遇する社会問題は、人間の人間による支配を示すものであることを教えた。かれが地理学者になることを決意したのは、このアメリカ旅行中のことであった。

帰国後の1857年から1870年代前半までのエリゼ・ルクリュは、『両世界評論』を始め、『パリ地理学協会誌』等の雑誌に、海外亡命中に観察したことをはじめ、地理学に関係した論文を矢継ぎ早に発表している。また、大出版社アシェットとの契約で、

旅行ガイドブック（Guides Joanne）の執筆に協力することになる。このような活動の中で地理学者としての彼の名を不動のものにしたのが、1868—9年にアシェットから出版された大著『大地』2巻の刊行である。これについてはすでに紹介したことがあるので、繰り返すことはしないが、本書にすでにルクリュ地理学とアナーキズム思想の萌芽を見ることができる⁵⁾。

このように、1850年代から60年代にかけてのおよそ20年は、エリゼ・ルクリュにとって、かれが後に大地理学者となる力を蓄える期間であったと考えられる。そしてエリゼは、1871年のパリ・コミューンにアナーキストとして突然姿を現すのである。

「突然」というのは、地理学では、エリゼ・ルクリュがアナーキストでもある地理学者として知られてはいたが、アナーキストとしてのルクリュ、またかれのアナーキズムの思想と地理学の関係についてはG. ダンバーやB. ジブランらの先行研究があるが、これまで十分検討されてこなかった。したがって、パリ・コミューンへの彼の参加が、あまりに唐突に見えたのであった。パリ・コミューンまでのエリゼ・ルクリュの地理学の仕事・活動以外の動向が、霧に包まれていたのである。1860年代、そしてパリ・コミューン以後、アナーキストの理論家・運動家としてのルクリュの姿を克明に浮かび上がらせたのが、マリー・フレミングの著書であった（Fleming, 1978; 1988）。

エリゼ・ルクリュのアナーキズム思想は、パリ・コミューン後に本格的に展開するとされる（Fleming, 1978, 105—）。しかしうえて見てきたように、自覚しているかどうかは別にしておかればすでに早くアナーキズムの思想を獲得していた。その思想が具体的に醸成されて行ったのが、海外亡命から帰国してパリ・コミューンまでのこの期間であったといえる。そしてそれは、かれの地理学が醸成されていくのと平行して行われていたのである。まず、エリゼ・ルクリュのアナーキズム思想形成とその運動の契機、背景となったと思われる事項について書きとめておこう。

ルクリュ兄弟が住んだパリのアパルトマンには、多くの共和主義者や社会主義者、パリに亡命していた外国人たちが集まる場所であり、小さなサロンを

なしていたという (Reclus, Paul, 1964, 58)。ルクリュ兄弟は、プルドンを尋ねたことはあったようだが、彼とのつながりを持つことはなかったという。

フレミングは、資料は欠いているけれども、エリゼ・ルクリュが 1865 年には『国際労働者協会 International Working Men's Association, IWWA』(いわゆる第一インター) のパリ地区のリストに入っていたことは確かだという (Fleming, 1988, 57)。このような労働者とのかかわり、また、上で述べたように、労働者を指導するような社会主義者たちとのつながり、なかでもエリゼの思想形成に大きな意味を持ったのは M.バクーニンとの出会いであった。

3.2. M. バクーニンとの出会い

バクーニンは、近代アナキズム思想の確立者、指導者の一人である。ヨーロッパに亡命し、1864 年イタリアに活動の拠点を定め、フィレンツェに定住、そこに秘密結社《国際友愛会 (同胞団) *Fraternité internationale*》を作った。同年メンバーを探しにパリにやってきたバクーニンは、ルクリュ兄弟に会っている。こうしてルクリュ兄弟とバクーニンとの関係が始まる。エリゼは、翌 1865 年春にシシリーのエトナ火山調査の後イタリーを旅行し、フィレンツェにバクーニンを訪ねている。しかしエリゼとバクーニンの関係がどのようなものであったのかは、1867 までははっきりしない、といわれる (Fleming, 1988, 61-2)。1867 年、ルクリュ兄弟が当初から支持者であったスイスの『平和自由同盟』において、バクーニンと積極的にかかわることになった。バクーニンは平和自由同盟を通して、国際労働者協会 IWMA での活動の場を見出そうと考えていたのである。この同盟は、かつてサン・シモン主義者 (シャルル・レムモニエ *Lemmonier*) が始めたもので、共和主義政府によるヨーロッパ統一問題を話し合う組織で、右から左まで異質な人々によって構成されていた。

1868 年に開催された『平和自由同盟』の第二回ベルン大会では、バクーニン (大会プログラムを起草する委員のひとり) とエリゼ (委員会の委員の一人であり) は、大いに協力しあうことになる。このときのエリゼの大会報告は、かれのアナキズム思想形成の上で重要なものとされており、つぎに項を改

め、取り上げよう。

3.3. エリゼ・ルクリュの『平和自由同盟』バーゼル大会の報告 (1868)

平和自由同盟は、1867 年ジュネーヴで第一回の会議を開いたが、プログラムを確定することができず、委員会に取り扱いを一任していた。その後、一年間委員会は争いの連続であった。というのは、委員会は多数派の自由主義者および急進派^{ラディカル}のブルジョワと少数派の革命的社会主義者とが対立していたからであった。バクーニンやエリゼ・ルクリュは後者に属していたことは言うまでもない (Reclus, 1911, I, 287-8) ⁶⁾

さて、ベルン会議のほうであるが、エリゼが直接かかわった 2 つの問題について述べよう。第 2 日目に取り上げられた「社会問題」がそのひとつである。エリゼはその準備委員会に属していたが、案を起草するための一致を得ることができなかったという (Ibid., 282)。それはバクーニンと協力して作成した「階級と個人の平等化」を理想とする案—「各人が障害なく一生を送るために、すべての人にとって出発点の平等」—であった。

第 4 日目にエリゼ・ルクリュが報告し、議論されたのが、アナキズム思想の基本的考え方の一つである「連合主義の問題 *question fédéraliste*」である。その部分をエリゼの兄への手紙を直接訳しておけば、次の通りである。

「全員が原理では一致していた。ただ私にとっては、どうしてもそれを正確にしたいと思っていた。盲目的愛国的 (狂信的排外主義) なるものの古い部分、(すなわち) 専制主義の機構である封建的な州 (プロヴァンス)、県 (デパルトマン)、大郡 (アロンディスマン)、徹底的に中央集権的な発明である現在の小郡 (カントン) や市町村 (コミューン) を解体した後、個人しかなく、その個人に好きなように互いに結びつくことを、私は示したし、私は論理的にもそのように信じるのである。それが理想的な正義である。コミューンやプロヴァンスに代えて、私は次のように提案した。すなわち、生産の結社 *associations de production* とこうした結社によって形成された集団を」 (Reclus, 1911, I, 285)。

この演説が、エリゼ・ルクリュがはじめてアナキズムの原理への賛同を公に示したものとわれ、ポ

ール・ルクリュはエリゼのアナーキズムに関する重要な資料であるとしている (Reclu, Paul, 1964, 49)。しかしこのエリゼの提案も、反対多数で否決されてしまったのである。このような結果ができることは、上で述べたように『平和自由同盟』の構成から言って明らかであった。ベルン大会は、その対立を白日の下にさらしたのであり、その結果、社会主義民主派は同盟を離れることになる。

この『平和自由同盟』ベルン大会のあと、バクーニンは『国際社会民主同盟』を結成し、非国際結社として IWMA への参加を認められることになる (Fleming, 1988, 66)。ルクリュ兄弟は、フレミングによれば、バクーニンの社会民主同盟に結びついていたが、1869～72 年にかけて、バクーニンとのコンタクトがほとんどないといわれる (Fleming, 1988, 66) 8)。

このバクーニンとエリゼが疎遠になったとき、実はバクーニンは、ジュネーヴからバクーニン支持者が多くいたジュラの連合と結びつき、ロマン連合、ついでジュラ連合を通して IWMA で活躍することになる。ロマン連合 (ジュラ派) とともに、1868 年 9 月の IWMA バーゼル大会では、土地の共同所有の原則を再度確認するとともに、マルクスと対立していた「相続権の廃止」問題では、マルクス派を圧倒する結果を得たのである (渡辺、1996)。

この時期がバクーニンの最後の絶頂期といつてよいだろう。しかし、70 年に入ると、ロマン連合の分裂、さらに IWMA のマルクスを中心とした総評議会の巻き返しが始まり、1871 年 9 月の IWMA ロンドン協議会、続く 1872 年 9 月の IWMA ハーグ大会をもってバクーニン、ジュラ派の「連合主義」は、マルクスの「集権主義」に敗北する 9)。バクーニンは除名されるとともに、総評議会はロンドンからニューヨークに移転され、マルクスが率いた第一インターの歴史は事実上幕を閉じる。このあとバクーニンは事実上引退状態に入り、1876 年さびしくこの世を去った。

68 年のベルン大会以降バクーニンとエリゼ・ルクリュの間に疎遠な時期もあったが、エリゼ自身バクーニンを敬愛していたし、バクーニンのエリゼに対しての人間的评价は高かった。バクーニンの葬儀に参列したものは極わずかであったといわれるが、エ

リゼはその中の一人であった (勝田、1967)。1876 年のバクーニンの死後、エリゼはバクーニンの書き残したものを整理し、出版している (バクーニン、1970 b, c)。

バクーニンが、集権主義と反集権主義の主導権をめぐるジュラ連合と連携しつつ、IWMA の中でマルクス派と熾烈な戦いを展開していた 69 年から 72 年は、エリゼ・ルクリュにとっては、普仏戦争とそれに続くパリ・コミュンへの参加、逮捕、監獄生活の時期にあたっている。エリゼ・ルクリュは、1860 年代には地理学上の仕事の忙しさの中で、社会主義民主主義者として、国際労働者協会 IWMA パリ支部委員会 (Paris Section) や平和自由同盟のメンバーとして、政治的・社会的問題に関わっていた 10)。こうしたかれの行動を通じて 1871 年 3 月 18 日から始まるパリ・コミュンへの参加、コミューナル・エリゼ・ルクリュを理解できるのである。

3.4. パリ・コミュンとエリゼ・ルクリュ

コミュンの間、エリゼは何をしていたのか。実はエリゼのコミュンでの行動は、短期間に終わってしまった。それは 4 月 4 日にパリ郊外のシャティヨン Chatillon の丘での戦いでヴェルサイユ政府軍に捉えられてしまったからである。そして彼自身いうように、パリ・コミュンにおいて、かれはオフィシャルなものにはなにもなかったという (Reclus, 1897, 296)。捕らえられたあと、各地の監獄を転々とし、裁判で終身刑ニューカレドニアへの流刑が決定する。しかしエリゼ・ルクリュは、すでに地理学者として、国際的にも名が知られていた。イギリスを中心に国際的な救済運動が展開され、かれ自身の意には反したことはあったが、結局 10 年間の国外追放の刑が確定し、1872 年 3 月よりスイスで国外追放の生活を送ることになる。

エリゼにとって、パリ・コミュンとはいったい何であったのか。それはその後の彼の生そのものに関わる問題であり、機会あるごとにかれはそのことに触れている。パリ・コミュンについてのかれのまとまったテキストは、コミュン四分半世紀後にコミュン参加者に対して行なわれたアンケート調査の回答書 (Reclus, 1897)、およびかれの晩年の大作『人間と大地』の第 5 巻に書いたパリ・コミュン

についての記述である(Reclus, 1905, V, 246-53)。それらを資料としてエリゼにとってのパリ・コミューンをまとめておこう。

まず、エリゼがことあるごとにパリ・コミューンについて語るとき、必ず述べるのは、純粋な気持でコミューンに参加し、パリ周辺やパリの街で殺されたかれら多くの人々たちに対する追慕と敬愛の念である。

「コミューンを心から迎え入れた総ての人々—かつての革命に加わった老練なひとたち、また自由にとりつかれた情熱的な若者たち—は、かれらが死に捧げられることあらかじめを知っていたのである。贖罪の犠牲者ともいべき彼らは、かれらの献身的高貴さとかれらの豊かな理念によって、パリ全体の姿の上に映し出されていた清らかな荘厳さを、またかれらのこの雄々しい覚悟と完璧な無心の日々、いままで経験したこともない荘重な高貴な姿をパリに与えていた清らかな荘厳さをもたらしたに違いなかった」(Reclus, 1905, 247)。

しかし、新しい社会を建設するためには、共通の意思を持ち、すでに明らかにされた知識を実践する必要があるのだが、エリゼによれば、このパリの反逆者たちは逆方向にも向かうような全くばらばらな集団で成り立っていたのだという(Ibid.)。そしてエリゼは、パリ市民やフランス国民の団結だけではなく、万民の繋がりを考えていたのである。

「パリを眺める人々(世界)は、インターナショナルによって宣言された人々の友愛の理念が、いかに生き生きとした現実のもととなったかを、驚きの念を持って確かに確認することが出来たのであった。…パリの人々がヴァンドーム広場の塔を倒したのも、支配者と闘う兄弟たちに対して友愛の共感を示すためであったのであり、パリ・コミューンを現代の進化において高く位置付けなければならないのはこの事実(支配者を倒すという)以外のなにものでもないであろう」(Ibid., 248-9)。

いずれにしてもこうした純真な人々を死に追いやり、またコミューン運動を失敗に導いた事実が何であったかをエリゼは指摘する。25周年のアンケートの回答において、かれは戦いに赴く4月4日直前の状況を生々しくつたえている。そこではコミューンを指揮した將軍たちの無能ぶりがあらわにされている(Reclus, 1897f)。そしてコミューン敗北の決定

的な事実として、

「コミューン政府の主要な、避けられない誤り—それは権力が構成される原理そのものに由来したからであるが、それはまさに政府が存在したということ、止む終えなかったとはいえ、それが人民(people)に取って代わったということの誤りであった。権力がもつ自然な作用、また指揮権に目が眩んだことが、それをいくらかフランス国家全体、共和国全体を代表するもの、またパリ以外のコミューン(市町村)との自由な結合に協力を求めるただ単にパリ・コミューンの代表ではないという考えに導いたのであった」(Reclus, 1905, 247-8)。

エリゼ・ルクリュは、このように既存の権力をそのままにしておいたことが、パリ・コミューン最大の失敗であったと考える。さきの不統一なパリ反逆者の中にも「少数の団一団だけは、コミューン国家の全組織を破壊すべきであること、市民の中から自然発生的に生まれてきた集団を妨げるような障害に対して押さえつけることを理解していた」(Ibid., 247)のであるが、かれが常にパリ・コミューンの経験として語るコミューン失敗の原因、それはエリゼの脳裏に焼き付けられ、その後のかれの革命観となる。

パリ・コミューンについて、エリゼ・ルクリュがそれに参加し経験したことを、またその結果の反省をかれの書き残したテキストから摘出してきたが、すでに知られるのは、エリゼのパリに対する限りない愛慕の念である。パリ・コミューンをはじめ、革命の都であるパリについてつぎのように書いている。われわれはここに地理学者にしてアナキスト・エリゼ・ルクリュを認めないであろうか。

「人間進化の総体において、ついで革命運動において唯一パリの名が有するこのすばらしい精神的な力(force morale)は、それを取り巻く地理的諸条件によって、物質的吸引力として説明される。あらゆる方角から蝶々が焼かれる危険を冒して光の元を目指してやってくる。セーヌ盆地の自然の中心に向かって川が流れ集まってくるのは、活動中心に向かって知性や野心のある人々を引き付ける運動のシンボルとおなじである。商売や職業上の顧客を見つけるために大都市にやってくるように、パリにやってくる移民だけが問題なのではない。この点で、パリは他の都市を抜いて、少ない時間で一層の富が生まれる。とくに問題なのは、この街の知的、精神的、芸術的活動やそこに集まった人々全体としてパリが示す魅力によって呼び集められた人々のそれであり、その

パリによって人々は魅惑されるのである」(Ibid., 251)。

そのパリは、そうしてまさしく人間解放の先駆者であったのである。

4. エリゼ・ルクリュにおけるアナキズムの確立—パリ・コミューン以後

4.1. アナキストとしてのエリゼ・ルクリュ

エリゼ・ルクリュにとって 70 年代半ばから 90 年代初めかけての時代は、スイスでの国外追放生活の中で、地理学者としかれの畢生の大作『新世界地理』全 19 巻が書き上げられていった時代である。その執筆はいうまでもなく、そのための資料収集や現地訪問(視察)など多忙な日々を送っていたはずである。その一方で、アナキズムの思想が、研ぎ澄まされ、豊かさを増していく時代でもあった。エリゼ・ルクリュの著作目録(後掲、文献 1) から知れるように、かれのアナキズム関係の著作は 70 年代後半以降に書かれたものである。つまりエリゼ・ルクリュにおいて、地理学とアナキズムの仕事は同時に進められていたのである。エリゼ・ルクリュのアナキズム思想の確立過程とその理論的特徴を見おく必要がある。

エリゼ・ルクリュは、ルガノに居を構え国外追放生活を始めるが、最初の 2 年間は、目立った政治活動を行っていないといわれる(Fleming, 1988, 96)。スイスに亡命して以来、連合主義インターナショナルのメンバーではあったが、支部(セクション)のメンバーではなく、1875 年にヴヴェ Vevey に転居してから、そこの支部(セクション)にも加わっている(Ibid., 97)。こうしてエリゼは、1870 年代の後半、バクーニンの死後、かれに代わるかのようにアナキズム運動の中心であったジュラの政治に深く関わるようになる。

かれが自らアナキズムを語り、アナキストを称したのは、1876 年ローザンヌで開かれたパリ・コミューン 5 周年の集会とジュラ連合の集会であったといわれる(Fleming, 1988, 101)。エリゼ・ルクリュが国家を否定するラディカルな考えを持つに至り、また集権主義者の説く革命政府の存在に反対したのもパリ・コミューンの経験に基づくものであった。

エリゼは 1877 年 3 月ジュラのサン・ティミエで「アナキと国家」と題する講演を行なっている(Reclus, 1877b)。ここでエリゼは、国家形態の歴史を振り返り、「最後の国家—それは人民の人民による国家を意味する一が、現実実践されるならば、いかに論理的結果においてアナルシー(アナキ)に帰結するかを示した」のである。

「あらゆる近代国家の傾向は、集権化にある。何かの中心からすべてを率いたいというこの主張は、刑務所モデルの機構に比較しうるものだ。

あらゆるものを国家に包摂することに反対して、社会の生き生きとした力が形成され、この自由な集団を、われわれは優遇しなければならない。

.....

古い観念や偏見に対して闘わなければならないし、自由な契約によって法を、人間の力の自由な結合によって国家の強制を置き換えなければならない」(Reclus, 1877b, 4)。

と、アナキズムの基本原則を確認している。またこの講演で注目されることは、エリゼが、「社会の経済力と政治的秩序を区別する必要があり、後者が廃止されたときでも、前者は存在し続けなければならないこと」を指摘している点である。そしてルクリュは、この革命の道は、既存の組織や法に基づいては達成し得ないことを彼自身編集委員のひとりであった革命的社会主義評論誌『労働者 Le travailleur』においても論じている(Reclus, 1878a)。また、既存の組織は、「革命的状態が“到来”し、それが政府の一部を占めるや、当然のこととして革命的であることをやめ、保守主義者になってしまう。これが宿命なのだ」と。したがって、ブルジョワとその国家とを同時に消滅させるためには、「到達すべき点を見失ってしまうような回り道をするよりも、われわれの目標に向かって直接歩むほうがよい」(Ibid. 11) というラディカルな思想に至っている。これがパリ・コミューンの経験に基づくかれのゆるぎない確信であった。

4.2. P. クロボトキンとの出会い

P. クロボトキンは、シベリヤの山岳地形やフィンランドの氷河研究で知られた地理学者である。バクーニン同様ロシア貴族の家柄に生まれながら「人民

の中^ド」の運動に参加し、やがて革命運動に身を投じる。1876年ヨーロッパに亡命、1877年2月ヴヴェにエリゼ・ルクリュを訪ねている。これがエリゼ・ルクリュとピエール・クロボトキンの最初の出会である(Reclus, Paul, 1964, 100-1)。当初二人の間は、必ずしもスムーズにはいかなかったといわれるが、時間とともに親密な関係になり真の友人として、アナキスト運動の理論と実践に協力することになった(クロボトキン, 1979, 下 201-2)。二人の間には、アナキズムに対する科学的基礎の見方に相違があったと、フレミングはいうが(Fleming, 1988, 128)、アナキズムは科学的に支えられるべき理論とみていたことで、二人は共通していた。エリゼ・ルクリュがアナキズムの理論を地理学という科学を通して追及していったのに対して、クロボトキンはもっぱらアナキズムの理論化につとめたのであった。70年代の末、ルクリュは、『新世界地理』第6巻に予定されていたロシア編の準備にクロボトキンの協力を要請し、他方、アナキズム運動が停滞する中で、1879年2月にクロボトキンがM. ドゥマトレとともに刊行を開始したアナキスト機関紙『反逆者 Le Révolté』にたいして財政的援助を惜まず、編集委員の一人に加わり、論陣を張っている。

また、1883年クロボトキンがリヨンの労働運動に絡んで逮捕され、3年の刑に処せられたとき、ルクリュは全面的な援助の手を差し伸べると同時に、クロボトキンが『反逆者 Le Révolté』に掲載していた記事を集め、自ら序文を書き、『叛逆者の言葉』を出版している(クロボトキン, 1970a)。さらにかれが序文を書いたものに『パンの略奪』がある(クロボトキン, 1970c)。このようにエリゼ・ルクリュはクロボトキンを助け、アナキズム理論の形成に大いに協力したのである。

4.3. エリゼ・ルクリュのアナキズム理論

クロボトキンを助け、協力するだけではない。エリゼ・ルクリュ自身もクロボトキンの訪問を受ける前後から、すなわち70年代の末から80年代にかけて重要なアナキズム理論に関する論考を発表している。この時期がまさにエリゼ・ルクリュのアナキズムの理論が確立され、深められてゆくときである。

そうした論考の中から、エリゼ・ルクリュのアナキズム理論の特徴を探っていくことにしよう。

1) 「進化と革命」の理論

エリゼ・ルクリュの革命理論としてもっともよく知られているのが「進化と革命」である。かれのライトモチーフともなった考え方で、さまざま講演、論考において触れられている。「進化と革命」と題した講演論考が発表されたのは、1880年クロボトキンのアナキスト機関紙『反逆者 Le Révolté』紙上においてである(Reclus, 1880)。後英訳され、パンフレットとしても出版され、広く読まれた。日本では戦前石川三四郎が英訳から翻訳し、かれのアナキズム教育・出版機関であった共学社のパンフレットとして出版されている。こうした考えをのちに集大成したのが、エリゼ・ルクリュの唯一のアナキズムについての本である『進化・革命・アナキズムの理念』である(Reclus, 1898)。

この「進化と革命」の議論それ自体は難解なものではない。まず「進化」と「革命」はそれぞれ独立した社会変動の形態ではなく、相互に関係した社会変動の過程としてみられるものである。「進化」とは、いわば準備の期間である。しかしそれは、自然が求める方向一すなわち社会主義的な社会に向かって一そのまま進化(進歩)していくわけではない。そのためには、突然の変化である、革命を必要とする。革命が、進化に続いて起こるとしても、ショック、革命は自然に放っておいて起こるのではない。エリゼがいうように「進化は、頭の中で行なわれ、革命を起こすのは腕である」(Reclus, 1878d)とされる。

つまり「進化と革命は、同一現象の二つの継起的行為であり、進化が革命に先行し、革命が将来の母である新しい進化に先行する」(Reclus, 1898a, 16)。いかなる革命もあらかじめ進化なしにはなしえないのであるが、しかし革命は必ずしもイコール進歩ではなく、正義(正当)の方へ方向付けられないこともありうることを指摘している(Ibid., 21)。したがって進化と革命は永久に繰り返される(進歩へ向けての)永久運動であり、進歩・退歩を繰り返しながら前進進歩していくとするのがかれの歴史観でもあった(Ibid.; 野澤, 1986a)。講演での「進化と革命」では、以上のことを認識する教育の場が、学校の外

の世界における経験、観察であることを主に論じている (Reclus, 1880b)。

2) 「アナキスト・コミュニズム」

クロボトキンと結びつけられる「アナキスト・コミュニズム」(猪木・勝田, 1967) は、1880年のショー・ド・フォン Chaux-de-Fonds におけるジュラ連合の会議で公式に採用されたという (Fleming, 1988, 109)。フレミングは、1876年におけるローザンヌでの(パリコミューン5周年)集会でのエリゼ・ルクリュの演説は、完全に「アナキスト・コミュニズム」のスピーチであったという M. ネットローの言を引用している (Fleming, 1988, 110)。

この考え方は革命後の分配の問題に関わる。ルクリュがどのように考えていたかを見ておこう。従来バクーニン派の集産主義^{コレクティヴィスム}では、分配は「労働」に基づいてなされる、という考えがとられていたが、次第に「必要」に応じてとする考えが主張されてくる。ルクリュはこの考えを支持していたが、さらにただ必要に応じてだけでなく、そこに「連帯」の必要性を感じていた。連帯の気持ちをもつこと、すなわち他者を慮って己の必要を考えること、そのことは「人間の発展においてより高い段階を示している」と考えたことによるのである (Fleming, 1988, 111)。

そのほか「所有」、「暴力」などアナキズムに関し取り上げねばならない多くの問題があるが、ここではごく簡単にルクリュの考えに触れておこう。上記「進化と革命」と同年『叛逆者 Le Révolté』に掲載された「労働者よ、機械を奪え！ 土地を奪え、農民よ！」において次のような注目すべき議論を述べている (Reclus, 1880a)。エリゼ・ルクリュによれば、私的所有の防御者たちは、小土地所有者を最良の仲間だといい、土地を奪い取ろうとしていると社会主義労働者たちにたいする警戒心を煽り立てている。たしかに土地を持つ農民と体しか持たない労働者との間には大きな違いがあるが、問題は土地を持たない農民と労働者であり、かれらには違いはない。しかし資本家の所有が発展していくに連れて、小土地所有者は大土地所有者に食われていくし、町工場^{アトリエ}も強力な工場に飲み込まれていこう。「資本や機械によって、土地の徹底的な収奪との競争の時がやってくると、小土地所有者にとってはまったく(立

ち行くことが)不可能になってしまい、そのときからかれは乞食になることしか残っていないであろう」から、結局、小土地所有者、小資本家も労働者と同じ状態に立ち至るのだと。エリゼは私的所有に関しては、それを支持するブルドン主義とは異なる立場をとっていた。

エリゼ・ルクリュは、また一時期組合活動、運動に関心を示していたこともあったが、70年後半以降はきっぱりとそれを拒否している。1889年第二インターが設立され、労働運動は、アナルコ・サンディカリズムの方向をとるが、ルクリュは第二インターには批判的であった (Fleming, 1988, 170)。

「暴力」に関しては、80年代、とくに90年代において、暴力を肯定する甥のポール^{Paul}の論文に絡んで、彼自身にとっても重要な問題となっていた。「エリゼがわれわれにとってもっとも興味深いのは、社会的人間、アナキエーのプロパガンダであることである」という (Paul, 1964, 99)。「社会主義者の仕事は、プロパガンダによって社会悪をしめすこと」にあった (Fleming, 1988, 129)。エリゼが、クロボトキンの言う「行為によるプロパガンダ」としてのテロリズムを受け入れたのは、それを目的の問題としたからである。

以上ざっと急ぎ足で見えてきたように、ルクリュのアナキズム思想は、「ラディカル」である。アナキズムは個人意識の確立を強調するところから、「個人主義」に陥りやすいが、ルクリュのそれは個人をこえた「普遍性」を説くところに特色がある。また、「小土地所有」や「組合主義」といった妥協的なあり方を徹底的に否定する。したがって「アナキスト・コロニー」のような個別主義も拒否することになる。そのような「中途」の形態を認めることは必ず逆の方向、保守的なものになるというのがパリ・コミューン以来のかれの徹底した思想である。

エリゼ・ルクリュは、真の意味の人類の進歩を幸福と理解し、「幸福は、われわれが理解するように、単なる個人的な受容ではない。たしかに“各人は幸福を個人でつくりあげる”という意味では個人的であるが、それが人類全体に広げられてはじめて正しい、深い、完全なものであるといえる…」 (Reclus, 1908, 540) とのべている。

5. エリゼ・ルクリュにおける地理学とアナーキズム—結びにかえて

以上のように1870年代後半から80年代にかけて、エリゼ・ルクリュは『新世界地理』の執筆と同時にアナーキズム理論と運動においても指導的役割をばしていた。すなわち地理学とアナーキズムは同時に進められていたのである。『新世界地理』の最終的刊行の目途がついたからであろうか、パリ・コミューンに加わったかどでの国外追放10年の刑期はすでに終えていたが、1890年にいってフランスに戻り、パリ近郊セーヴルに居を定める。世紀末のパリは、ルクリュにとって決して住みやすい場所ではなくなっていた。アナーキズム運動は、個別化、暴力化しており、かれに嫌疑が及ぶこともあったという¹³⁾。しかしかれの立場は、ゆるぎないものであった。

1893年、ベルギーのブリュセル自由大学に地理学教授として招聘されることになった。大学当局の反対にあうが、それに抗議する教授団、学生、同窓生などによって新大学が設立され、94年3月「比較地理学」の講義を開講する¹²⁾。

一方、アナーキストは、1896年第二インターから追放される。第一インターが設立された同じホールでアナーキストたちの会合が開かれ、そこでのエリゼ・ルクリュの演説は自由な精神の持ち主たちの共感で満ちたその場の雰囲気と相応しいものであったといわれる。すなわち、アナーキストとして議会制度(政府)と法を通した革命は不可能であること、法は社会変動を促進させず、かえってそれを差し止めてしまうこと、アナーキズムの理想が人間歴史の主要な要因であり、その理念が成長すれば、革命がそれに従い、それを押しとめることは不可能であると(Fleming, 1988, 172)。意識、理念の重要性を説く一種独特の革命理論。1898年にはかれの唯一のアナーキズムの思想書である『進化・革命・アナーキズムの理想』がまとめられる。

晩年の10年はかれの地理学とアナーキズムが文字通り融合していくときではないのか。それをわれわれは最後の大作『人間と大地』に見ることができるのではないだろうか。それはエリゼの地理学の集大成であるとともに、地理学とアナーキズムが結びついた書、あるいはアナーキズムの思想の基に書かれ

た地理学書といえるのではないであろうか¹³⁾。

われわれは前稿で検討したエリゼ・ルクリュの地理学と本論文で取り上げてきたかれのアナーキズムの思想とを一緒に検討するところに来た。ルクリュにおいて地理学とアナーキズムがそれぞれ別々にあるものではないことはいまさういまでもないことであろう。エリゼ・ルクリュにおいて地理学の思想がアナーキズムの思想であり、アナーキズムの思想が地理学の思想でもあるということである。しかしわれわれがこれまでみてきたエリゼ・ルクリュの地理学、そしてかれのアナーキズムの思想のどこにそのことが言えるのか。

5.1. ルクリュの地理学の根底にあるもの—アナーキ—

エリゼ・ルクリュのアナーキズムに対する揺るぎない確信は、それが科学に支えられているところにある。かれは、生涯科学に対する関心・探求を怠らず、アナーキズム運動(理論的研究とともに実践的運動)と統一させていたのである。その科学がかれにとって地理学であったことはいうまでもない¹⁴⁾。かれにとって地理学とはなんであったか。いま一度簡単に振り返ってみよう。

エリゼ・ルクリュがはじめて地理学に目覚めたのは、1851年ベルリン大学におけるカール・リッターの講義においてであったことはよく知られている。リッターの人間と大地は一体化した、調和をもった全体であるとの観念に深く感銘を受け、のちイングランド、アイルランドを経てアメリカ旅行において、エリゼは、大地を研究したいこと、自分が行ないたい研究は唯一地理学であることを、故国母への手紙で伝えている(Reclus, 1911, I, 100; 野澤, 1986a)。

一方、人間解放の理論であるアナーキズムは、「主人(支配者)のいない社会」を説く。人間本来のあり方は、誰にも拘束されることのない自由で、平等な、正義の社会における存在である。このようにアナーキズムが「アナルシー(アナーキ—)」として表象する姿は、少なくともエリゼ・ルクリュの場合、自然の認識に基づいていることは疑いない。かれは自然の生活、自然の観察の中で、人間を含めて大地という自然は、一つの統一された、調和のある全体であるという観念を早くから自分のものにしていたこ

とは上で触れた。人間の存在は、自然、大地と切っても切れない関係にあり、そこにおいて人間の自由とは、人間が自然の秩序、自然の法則に従っていくことにほかならない（この認識が、かれの最初の地理学の大作『大地』でのべられている）。

人間の自由とは、自然法則にしたがうことだというルクリュの主張は、なにも自然決定論を意味するわけではない。自然への人間の働きかけについて、ルクリュは、人間（存在）と自然（環境）との相互作用が、歴史的に人間（存在）と（地球）大地との間にいかに多様な関係を生み出してきたかを論じている（Reclus, 1864）¹⁹。（その現実の姿が、『新世界地理』で大陸、各国、各地方について記述された。）

しかしより重要なことは、人間（存在）と大地自然との関係が、人間と人間相互の関係でもある（その関係を介して関係する）ことをルクリュは見取っていたことである。最後の著作が、『人間と大地』となっているが、もともと『人間、社会地理学』であることが、そのことを含意しているであろう（Reclus, 1925, III, 178）。人間の歴史を見れば明らかなように、人間は自然の秩序、自然の法則にかならずしも従っているわけではない。ルクリュは歴史においてその一般的、法則的な事実を問題にする。それが『人間と大地』全6巻の冒頭に書かれた社会地理学的事実、社会地理学的法則ともいってよいとされる3つの事実である。1) 階級闘争、2) 均衡の追求、3) 個人の自主的決定がそれであった（野澤, 1986）。

5.2. 自然の概念

以上簡単に振り返ったことから、エリゼ・ルクリュにおいて地理学とアナーキズムの根底には、「自然」があるということが判明する。この自然とはいったい何であろうか。エリゼが地理学で語る自然は、まず地球、すなわち大地のことであることは明白である。

一方、「自由であるとは、自然の秩序、自然の法則に従うことである」、「アナーキーな社会へ進むことが自然な社会進化である」、「社会は自然に社会主義の方向に発展する」、「社会主義の観念は人類にとって自然なものである等、エリゼはアナーキズムをかたるとき、「自然」という言葉をしきりに使用する。かれにとってアナーキズム自体が自然なのであるが、

この「自然」とは何であろうか。

「自然」の概念は、ヨーロッパの哲学、思想の始まり以来論じられてきた大問題のひとつである。それを振り返ることはここでの問題でもないし、筆者に出来ることではない。エリゼ・ルクリュは彼が使う「自然」についてその概念をどこでも論じてはいないが、それがヨーロッパ哲学・思想の長い歴史を踏まえたものであることはいうまでもない。かれの自然の概念には、ギリシャ思想史、哲学史において議論されてきた「ノモス」に対する「ピュシス」の意味を含むものであることは論を待たない（ハイマン、1983）。さらに彼にずっと近い時代であるフランス啓蒙主義哲学・思想においては、自然は主題の一つであった。その自然の概念、自然法の観念にも大きな影響を受けているであろうことは、想像に難くない。モルリー（1951）の『自然の法典』、ドルバック（1999）の『自然の体系』しかり、さらに J.J. ルソーの自然概念と共有するものがあることも明らかである。しかしかれが生きた時代は、その一世紀後の時代である。ニュートン後の自然科学の新しい発見、とりわけダーウィンに代表される「進化論」の生物的自然観・自然概念と重なる時代である。ルクリュは、ダーウィンの進化論を革命的観点から高く評価する一方、「適者生存」や「自然淘汰」の理論については、「相互扶助」をもって自然的な社会進化＝進歩の道であることを主張したのである。これはクロポトキンとも共通するものであった。相互扶助は、ルクリュ（クロポトキンも）にとって、兄弟愛に基づく共同であり、自然発生的な連帯であり、「自然の」傾向であった。

エリゼ・ルクリュは、『人間と大地』第一巻の開巻第一ページの冒頭に地球を両手で支えた図のともにエビグラフとして次のように書いている。「人間は、自然それ自身を意識する自然である」と。ルクリュの述べる「自然」が以上見てきたように、生物、人間をも含んだ地球、大地の自然であり、その自然がもつ秩序、法則であった。ルクリュは大地を生物をも含んだ統一した調和した自然の全体であり、その調和は、運動の中の調和、混沌、多様性の中の調和とみていた。すなわち人間と大地、自然は一体化したのものとして捉えられている。クラークとマルタンは、それを自然内人類 *humanity in nature* とよんでい

る (Clark et Martin, 2004)。ここにかれらは、エリゼ・ルクリュの社会理論におけるエコロジカルな見方の先駆者を見るのである。日本の経済哲学者梯明秀は、カール・マルクスの全思想を「全自然史過程」として捉えようとした (梯, 1980)。エリゼ・ルクリュの思想もまた、まさに「全自然史過程」と呼ぶに相応しいものであった。

注

- 1) “Autour de 1905: Elisée Reclus – Paul Vidal de la Blache. Le géographe, la cité et le monde, hier et aujourd’hui,” Montpellier – Pézenas, 4-5 et 6 juillet 2005.; “Elisée Reclus et nos géographes : Textes et Prétextes,” Colloque international, Lyon 8-9-10 septembre 2005.
- 2) エリゼ・ルクリュの地理学研究を主とした G.S. Dunbar (1978) の著書においても、そのことに触れられているが、それを除いては、先に述べたようにルクリュの社会思想面を捨象したため、その方面の文献には手をつけずじまいであった。
- 3) 後にタイトルを改め、新装版が出版されている (Fleming, 1988)
- 4) 兄エリーとのつながりは、まさに兄弟愛のそれであり、エリゼが、多くの影響を兄エリーから受けて生きたことは、論者が共通して指摘するところである。
- 5) バクーニンの影響を感じ取るものもある。たとえば、Leunis et Neyts, 1986, p.142.
- 6) このときの報告の内容については、エリゼが兄エリーに詳しい手紙を送っている。これが資料とされてきたが、フレミングは Bulletin stenographique にあたる (Fleming, 1988, note 72, p.206)。
- 7) エリゼ・ルクリュが書いたその宣言は以下のとおり。「平和自由同盟会議の構成員の多数派が、感情的にまた明白に階級や個人の経済的・社会的平等化に反対を表明していること、またこの原理の実現を何ら目的としないプログラムや政治行動は、社会主義民主主義者、すなわち平和と自由を意識し、理にかなったものとする仲間たちによっては受け入れることはできないと考え、ここに署名するものは同盟から分かれることを義務と信ずるものである。」(18名が署名) (Reclus, 1911, 288)。
- 8) その理由の一つが、1868年「平和自由同盟」が開かれているとき、スペインに混乱が生じ、兄エリーがおくりこまれるが、エリーは共和派と結びつく活動方針をとったため、バクーニンは、ルクリュ兄弟、特に兄をブルジョワ的と見ていたようである (Fleming, 1988, 66)。
- 9) 集権主義、あるいは権威主義と反集権、反権威主義、連合主義について。アナーキズムは、‘支配者のいない社会 (society without masters)’ を表象していたが、それはまた 19 世紀の社会主義者の目標でもあった。しかしその目標を達成する手段、過程に意見の相違があった。カール・マルクスが指導する国際労働者協会の総評議会は、連合主義の説く自由な個人の連合による分散化 decentralisation では、既存の秩序を破壊することはできないとし、唯一の政治権力のみが国家の抑圧機関をして政府の行政 (管理) 機能を放棄させることができると主張した (Fleming, 1988, 98.)。こうして「集権主義、権威主義者 authoritarians」と「連合主義、反権威主義者」の対立が生まれたのである。前者がマルキストグループの主張であり、後者が連合主義アナーキストの主張である。
- 10) エリゼ・ルクリュは、1869年にロンドンで開催された国際労働者協会の総評議会上に客員 (visiter) として参加している。そこでカール・マルクスにあい、かれから『ルイ・ナポレオンのブリューメール 18 日』をおくられている。また、そのころ出版間もない『資本論』の仏訳者としてエリゼ・ルクリュが候補者としてあがっていた。そのことはエンゲルスをはじめマルクスの友人たちと交換された書簡で知ることができる。それについては、フレミングの著書で取り上げられている (Fleming, 1988, 57, 204)。マルクス M.E.L 研究所編, 1960)、マルクス・エンゲルス (1973-74)。
- 11) パリ地理学協会、英国王立地理学協会からのメダルの受賞は、警察にとってルクリュを扱いにくいものしていたという (Fleming, 1988, 166-7)
- 12) その事情については、ベルギー高等研究院と地理学協会のシンポジウム参照 (Institut des Hautes Etudes de Belgique et la Société Royale belge de Géographie, 1986)。
- 13) 前稿で、筆者はエリゼ・ルクリュの『人間と大地 (地人論)』を人文地理学の概論書と位置づけたが、アナーキズムの思想に基づいたものであることを強調すべきであろう。
- 14) かれの地理学を現代的な意味の個別科学の地理学に狭く限定して考えるのではなく、自然科学から、人文・社会科学をも含むものとする必要がある。しかし核心は地理学にあったことはいままでもない。
- 15) エリゼは、1851年のエッセーで「異なった文明が生み出したあらゆる人類の理念が到りつくのは、この自由という偉大な理念であり、あらゆる国々が獲得した真実を互に交換し合うのはこの自由のためである」と述べている (Reclus, Paul, 1964, 51)。

文献

- 1) エリゼ・ルクリュのアナーキズム関連文献*(地理学三部作を含む)
- 1851 "Développement de la liberté dans le monde." *Le Libéraire*, 28 août—1 décembre 1925.
- 1864 "L'Homme et la Nature. De l'action humaine de la géographie physique." *Revue des Deux Mondes*, vol. 54 (15 décembre 1864), 762—71.[*Compte Rendu de Man and Nature* by G.P. Marsh]
- 1868—69 *La Terre, Description des phénomènes de la vie du globe*. 2 vols, Paris, Hachette.
- 1873 "Quelques mots sur la propriété." *Almanach du peuple pour 1873* (St-Imier. 1873)
- 1876 "L'avenir de nos enfants." *La Commune: Almanach socialiste pour 1877*. Genève, Imprimerie jurassienne. 1^e éd. Genève, Imprimerie du Robotnik, 1876, 87p.
- 1876—94 *Nouvelle Géographie Universelle, La Terre et Les Hommes*, 19 vols. Paris, Hachette.
- 1877a "La Grève d'Amérique." *Le Travailleur*, vol. 1, no. 5 (septembre 1877), 6—16.
- 1877b "St-Imier. (Correspondance)." *Bulletin de la Fédération jurassienne de l'Association internationale des travailleurs*, 4^e année, no. 9 (sic) (11 mars 1877), 4.
- 1878a "L'évolution légale et l'Anarchie." *Le Travailleur*, vol. 2, no. 1 (janvier—février 1878), 7—14.
- 1878b "Au compagnon Lefrançais." *Le Travailleur*, vol. 2 (février—mars 1978), 19—21.
- 1878c "Les Chinois et l'Internationale." *Almanach du peuple*, 1874; *Le Travailleur*, vol. 2, no. 3 (mars—avril 1878), 22—31.
- 1878d "Congrès annuel de la Fédération jurassienne (tenu à Fribourg, les 3, 4 et 5 août 1878)." *L'Avant-Garde*, 2^e année no. 32 (12 août 1878), 1.
- 1878e *La Peine de mort*. Conférence faite à une réunion convoqué par l'Association ouvrière de Lausanne. Genève, Editions du Révolté, 10p.
- 1880a "Ouvrier, prends la machine ! Prends la terre, paysan ! " *Le Révolté*, 1^e année, no.25 (24 janvier 1880), 1.
- 1880b "Evolution et Révolution". *Le Révolté*, 1^e année, no.27 (21 février 1880), 1—2.
- 1882a "L'Anarchie et le suffrage universel." *Le Révolté* 3^e année, no.24 (6 janvier 1882), 1—2.
- 1882b (et Carlo Cafiero) "Préface" d' *Dieu et l'Etat* par Michael Bakounine. Paris.
- 1883 "Le Gouvernement et la morale." *Le Révolté* 4^e année, no. 23 (6 janvier 1883), 1.
- 1884 "Anarchy: by an Anarchist." *The Contemporary Review*, vol. 45, no.5 (May, 1884), 627—41.
- 1884—1885 "Les Produits de la terre." *Le Révolté* 6^e année, no. 20 (23 novembre—6 décembre 1884), no. 26 (15—28 février 1885) .
- 1885 "Préface" de *Paroles d'un Révolté* par Pierre Kropotkine. Paris, Flammarion, x, 343p.
- 1887a "Les Produits de l'industrie." *Le Révolté*, 8^e année, no. 45 (26 février—4 mars 1887), 1, no. 47 (12—18 mars 1887), 1, no. 49 (26 mars—1 avril 1887), 1.
- 1887b "La Richesse et la misère." *Le Révolté / La Révolte* 9^e année, no. 12 (25 juin—1 juillet 1887), *La Révolte*, 1^{ère} année, no. 8 (5—11 novembre 1887).
- 1889a "L'Evolution de la morale. Le Vol et les voleurs." *La Révolte*, 2^e année, no. 22 (10—16 février 1889), 1—2.
- 1889b "Pourquoi nous sommes anarchistes !" *La Société nouvelle*, no. 31 (31 août 1889). Reproduit dans Colloque Elisée Reclus. *Revue belge de Géographie* 110^e année 1989, 136—37.
- 1889c "Quelques mots sur la propriété." *La Société nouvelle*, 5^e année, tome 1, no. 51 (31 mars 1889), 322—29.
- 1889d "Préface" de *La Civilisation et les grandes flueves historiques* par Leon Metchnikoff. Paris, Hachette, v—xxviii.
- 1891 *Evolution et Révolution* (Geneva, 1880, 1884: Paris, 1891) .
- 1892 "Préface" de *La Conquête du pain* par Pierre Kropotkine. Paris, P.-V. Stock, v—xv.
- 1893 *A mon Frère, le paysan* (Geneva, 1893).
- 1894a *La Formation des religions*. (Brussels, 1894)
- 1894b "Hégémonie de l'Europe." *La Société nouvelle*, 10^e année, tome 1, no. 112 (avril 1894), 433—43.
- 1894c "L'Idéal et la Jeunesse." *La Société nouvelle*, 10^e année, tome 1, no. 114 (juin 1894), 721—31. Reprouit dans Cornuault, Joël : *Elisée Reclus. Du sentiment de la nature dans les sociétés modernes et autres textes*. Premières Pierres, 2002, 90—103.
- 1894d *Leçon d'ouverture du cours de Géographie comparée dans l'espace et dans le temps*. La Revue de l'Université, Bruxelles, 1894 16p. Reproduit dans Cornuault Joël : *Elisée Reclus. Du sentiment de la nature dans les sociétés modernes et autres textes*. Premières Pierres, 2002, 104—18.
- 1894e "East and West" *The Contemporary Review*, vol. 66, no. 346 (Oct. 1894), 475—87.
- 1894f "Quelques mots d'histoire" *La Société nouvelle*, 10^e année (novembre 1894), 489—94.
- 1895a "The Evolution of City." *The Contemporary Review*, vol. 67, no.2 (Feb. 1895), 246—64.

- 1895b "Russia, Mongolia and China" *The Contemporary Review*, vol. 67, no. 5 (May 1895), 617–24.
- 1895c "La Cité du bon accord" *The Evergreen, A Northern Seasonal*, Part 2, *The Book of Autumn*. 103–06. Edinburgh, Patrick Geddes and Collègues. Reproduit dans *Almanach de la question sociale (illustré) pour 1897* (Paris, 1897).
- 1896a *L'Anarchie*. Paris, « Temps Nouveaux », 23p.
- 1896b "Renouveau d'une cité." *La Société nouvelle*, 12 année, tome 1, no. 138 (juin 1896), 752–58.
- 1896c "The Progress of Mankind" *The Contemporary Review*, vol. 70 (1 Dec. 1896), 761–83.
- 1897a "La Grande famille" *Le Magazine international*, janvier 1897; translated as *The Great Kinship* by Edward Carpenter (London, 1900).
- 1897b "L'Origine animale dell'uomo" *Almanaco popolare socialista* (Turin, 1897).
- 1897c "Quelques mots sur la révolution bouddhique" *L'Humanité nouvelle*, vol. 1 (juin 1897), 139–45.
- 1897d "Préface" de *La Bibliographie de l'Anarchie* par Max Nettlau. Brussels Bibliothèque des « Temps Nouveaux ». Paris, P.-V. Stock.
- 1897e "Préface" de *Le Socialisme en danger* par F. Domela Nieuwenhuis. Paris, P.-V. Stock. Reprouit dans Cornuault, Joël : *Elisée Reclus. Du sentiment de la nature dans les sociétés modernes et autres textes*. Premières Pierres. 2002, 145–48.
- 1897f "La Commune. M. Elisée Reclus" *La Revue blanche*, Tome XII, (Premier Semestre 1897), 296–98.
- 1898a *L'évolution, la révolution, et l'idéal anarchique*. Paris, P.-V. Stock.
- 1898b "Pages de sociologie préhistorique" *L'Humanité nouvelle*, vol. 2, no. 8 (février 1898), 129–43.
- 1898c "Notre Idéal" *Almanach de la question sociale (illustré) pour 1898* (Paris, 1898).
- 1899 "Metamorphoses du progrès" *Almanach de la question sociale pour 1899*, 17–19.
- 1900a "Les Colonies anarchistes" *Les Temps nouveaux*, 6^e année, no. 11 (7–13 juin 1900), 1–2.
- 1900b "La Chine et la diplomate européenne." *L'Humanité nouvelle*, vol. 7, no. 39 (septembre 1900), 257–70.
- 1900c (et Georges Guyou (Paul Reclus)) "L'Anarchie et l'Eglise". Le supplément littéraire des *Temps nouveaux*, vol.3, no. 19 – 20 (1900), 158 – 61. Reproduit dans Hénocque, Guy, *Elisée Reclus*. Editions libertaires, 2002, 37–47.
- 1901 "On Vegetarianism" *The Humane Review*, vol. 1, no. 4 (janvier 1901), 316 – 24. ; "A propos du végétarisme" *La Réforme alimentaire*, mai 1901, 37–45.
- 1903 "Le Panslavisme et l'Unité russe" *La Revue*, vol. 47 (1 novembre 1903), 273–84.
- 1904a "Le patriotisme est-il incompatible avec l'amour de l'humanité? Enquête." *La Revue*, vol. 48 (15 février 1904), 517–18.
- 1904b "Origines de la religion et de la morale" *Les Temps nouveaux*, vol. 9, (27 février–19 mars 1904).
- 1905a *Elie Reclus 1827–1904*. Paris, L'Emancipatrice ; "Vie d'Elie Reclus" Reclus, Paul 1964 : *Les Frères Elie et Elisée Reclus* (Paris, 1964), 157–84.
- 1905b "Nouvelle proposition pour la suppression de l'ère chrétienne." *Les Temps nouveaux*, vol. 11, no. 1 (6 mai 1905), 1–2.
- 1905c *Le mariage tel qu'il fut et tel qu'il est*. Avec une allocution d'Elisée Reclus (et Elie Reclus) (Mons, 1907); "Unions libres" *Les Arts de la vie*, July 1905.
- 1905–08 *L'Homme et La Terre*, 6 vols. Paris, Librairie Universelle. 1905–8.
- 1911-25 *Correspondance*, 3 vols. (Paris, 1911–25).
- *次の web site に Elisée Reclus の詳しい文献が掲載されている。
http://melio.univ-montp3.fr/ra_forum/reclus/oeuvres/fra_nçais_oeuvreshtml
- 2) エリゼ・ルクリュに関する参考文献
 Boino, Paul 2002: "La pensée géographique d'Elisée Reclus." Hénocque, Guy (éd.): *Elisée Reclus*. Editions libertaires, 23–35.
- Chambordon, J-C. & Mejean, A. 1988: "Villes et campagnes selon Elisée Reclus". *Cahiers d'Economie et Sociologie Rurales*, No 8, 3^e trimestre, 67–74.
- Chardak, Henriette 1997: *Elisée Reclus. L'homme qui aimait la Terre*. Stock, 582p.
- Clark, P. John 1996: *La pensée sociale d'Elisée Reclus : Géographe Anarchiste*. Traduction de Sylvie Tomolillo, revue par Ronald Creagh. Atelier de création libertaire, Lyon, 142p.
- Clark, P. John 1996: [Review] " Marie Fleming: The Freedom of Geography". *Social Anarchism*, 22, 57–65.
- Clark, P. John 1997: "Dialectical Social Geography of Elisée Reclus". Light, Andrew and Smith, Jonathan M., eds.: *Philosophy and Geography*, I, *Space, Place, and Environmental Ethics*. Rowman & Littlefield Publishers, Lanham, Boulder, New York, London, 117–42.

- Clark, P. John and Martin, Camille (edited) 2004: *Anarchy, Geography and Modernity: The Radical Social Thought of Elisée Reclus*, Lexington Books, Lanham, Boulder, New York, Toronto, Oxford, 273p.
- Cornuault, Joël 2002: *Elisée Reclus. Du sentiment de la nature dans les sociétés modernes et autres textes*. Premières Pierres. 212p.
- Dunbar, Gary, S 1974: "Elisée Reclus and The Great Globe". *Scottish Geographical Magazine*, Vol. 90, 57–66.
- Dunbar, Gary, S. 1978: *Elisée Reclus : Historian of Nature*. Archon, Hamden, Conn., 193p.
- Dunbar, Gary, S. 1981: "Elisée Reclus, an Anarchist in Geography". Stoddard, D., ed.: *Geography, Ideology and Social Concern*, Basil Blackwell, Oxford, 154–64.
- Fleming, Marie 1979: *The Anarchist Way to Socialism: Elisée Reclus and Nineteenth-Century European Anarchism*. Croom Helm, London, 299p.
- Fleming, Marie 1981: "Life, Liberty and the Pursuit of a Natural Order: The Anarchism of Elisée Reclus" *Social Anarchism*, Vol.2, No.1 (No. 3), 19–35.
- Fleming, Marie 1988: *The Geography of Freedom: The Odyssey of Elisée Reclus*. Black Rose Books, Montréal, New York, 246p.
- François, Albert 1905: *Elisée Reclus et l'Anarchie*. Ghent, 48p.
- Gaidoz, Z. 1875: [Review] "La géographie universelle de M. Elisée Reclus". *La Revue politique et littéraire*, 2^e série 5^e année (No 1) 3 juillet 1875, 39–43.
- Geddes, Patrick 1905: "A Great Geographer: Elisée Reclus". *Scottish Geographical Magazine*, 21, 490–96, 548–55.
- Ghio, Paul 1929: "En souvenirs d'Elisée Reclus". Ghio, Paul: *Etudes italiennes et sociales*. Librairie des Sciences politiques et sociales, Marcel Rivière, Paris, 197–215.
- Giblin, Béatrice 1976: "Elisée Reclus: géographe, anarchisme". *Hérodote*, 2, 30–49.
- Giblin, Béatrice 1979: "Elisée Reclus, 1830 – 1905 Freeman", T.W. & Pinchemel, P. eds.: *Geographers: Bibliographical Studies*, 3, 125–32.
- Giblin, Béatrice 1981a: "Elisée Reclus, 1830~1905". *Hérodote*, 22, 6–13.
- Giblin, Béatrice 1981b: "Elisée Reclus et les colonisations". *Hérodote*, 22, 56–79.
- Giblin, Béatrice 1981c: "Reclus, un écologiste avant l'heure ?" *Hérodote*, 22, 107–18.
- Giblin, Béatrice 1982: "Introduction. Elisée Reclus: L'Homme et La Terre", François Maspéro, Paris, 5–99.
- Girardin, P. et Bruhnes, Jean 1906: "Conceptions sociales et vues géographiques: La vie et l'oeuvre d'Elisée Reclus (1830–1905)". *Revue de Fribourg*, 1906, 274–87, 355–65.
- Gonot, Roger 1996: *Elisée Reclus: Prophète de l'idéal anarchique*. Edition Covedi, Pau, 205p.
- Hénocque, Guy (éd.) 2002: *Elisée Reclus*. Editions libertaires, 48p.
- Hénocque, Guy 2002: "Une vie, Elisée Reclus, une conscience libre". Hénocque, Guy, *Elisée Reclus*. Editions libertaires, 1–22.
- Institut des Haute Etudes de Belgique et la Société Royale belge de Géographie 1986: *Colloque Elisée Reclus. Revue belge de Géographie*, 110^e année, no. 1.
- Ishill, Joseph 1927: *Elisée and Elie Reclus: In Memoriam*, published privately at The Oriole Press, Berkeley Heights, New Jersey, U.S.A.
- Kropotkin, Peter 1905: "Elisée Reclus". *Geographical Journal*, 26, 337–43. (宮田晃一訳、『クロボトキン全集』第三卷 春陽堂 247–316) .
- Lacoste, Yves et al. 1981: *Elisée Reclus. Un géographe libertaire. Hérodote*, 22.
- Lacoste, Yves 1981: "Géographicité et géopolitique: Elisée Reclus", *Hérodote*, 22, 14–55.
- Lacoste, Yves et al. 2005: "Elisée Reclus". *Hérodote*, no. 117, 2^e trimestre.
- Leunis, Eric et Neyts, Jean-Mari 1986: "La formation de la pensée anarchiste d'Elisée Reclus". *Revue belge de Géographie*, 110^e année, no. 1, 139–151, annex 152–154.
- Marshall, Peter 1992: "Elisée Reclus: The Geographer of Liberty". Marshall, Peter: *Demanding the Impossible: A History of Anarchism*. Fontana Press, 339–344.
- Mikeselle, M.W. 1959: "Observation on the writings of Elisée Reclus". *Geography*, 44, 221–26.
- Nozawa, Hideki 1986: "Le sentiment de la nature chez Elisée Reclus". Nozawa, H. Ed.: *Cosmology, Epistemology and the History of Geography*, Kyushu University, Fukuoka, 51–61.
- Nettlau, Max 1928: *Elisée Reclus, Anarchist und Gelehrter*. Berlin.
- Nettlau, Max 1929: "Bakunin and Elisée Reclus". In Ishill, 1929, 197–209.
- Olwig, K.R. 1980: "Historical geography and the society/nature "problematic"; the perspective of J.F. Scouw, G.P. Marsh and E. Reclus". *Journal of Historical Geography*, 6, 29–45.
- Reclus, Paul 1964: *Les Frères Elie et Elisée Reclus ou du Protestantisme à l'Anarchisme*. Les Amis d'Elisée

- Reclus, Paris, 209p.
- Sarrazin, Hélène 1985: *Elisée Reclus ou le passion du monde*. Editions la Découverte, 263p.
- Schrader, F. 1905: "Elisée Reclus". *La Géographie*, 12, 81-86.
- Stoddart, D.R. 1975: "Kropotkin, Reclus, and 'relevant' geography". *Area*, 7, 188-90.
- Stoddart, D.R. 1981: "Human Geographer. The Enigma of Elisée Reclus" [Review of Dunbar, G.S.: Elisée Reclus: historian of nature]. *Progress in Human Geography*, 5, 119-24.
- 石川三四郎 1948: 『エリゼ・ルクリュ 思想と生涯』、国民科学社、京都、244p.
- 田中阿歌麻呂 1905: 「佛国の地理学者エリゼ・ルクリュ先生逝く」、地学雑誌, 17, 578-584.
- 野澤秀樹 1986a: 「エリゼ・ルクリュの地理学体系とその思想」、地理評、59、635-53.
- 野澤秀樹 1986b: 「エリゼ・ルクリュ地理学のための序章一彼の自然観・自然描写について」、水津一朗先生退官記念事業会編『人文地理学の視園』 大明堂、13-23.
- 山上万次郎 1913: 『最近批判地理学』、育英出版、400p.
- 3) その他参考文献
- バクーニン (石堂清倫訳) 1970a: 「国家と無政府」、『バクーニン I』アナキズム叢書、三一書房。(Бакунин, М.: *Государственность И Анархия*, 1873)
- バクーニン (勝田吉太郎訳) 1970b: 「神と国家」、『バクーニン I』アナキズム叢書、三一書房。(Bakounine, Michel: *Dieu et L'Etat*, édité par Cafiéro, C. et Reclus, E. Genève, 1882)
- バクーニン (江口幹訳) 1970c: 「パリ・コミューンと国家の観念」、『バクーニン I』アナキズム叢書、三一書房。(Bakounine, Michel: *La Commune de Paris et la notion de l'Etat*, édité par Elisée Reclus. Au bureau des "Temps nouveaux", 1899, 23p.)
- ハイニマン (広川洋一[ほか]訳) 1983: 『ノモスとピュシス: ギリシャ思想におけるその起源と意味』みすず書房。(Heinimann, Felix: *Nomos und Physis: Herkunft und Bedeutung einer Antithese im griechischen Denken des 5 Jahrhunderts*. Basel, Friedrich Reinhardt. 1965)
- ドルバック (高橋安光・鶴野 陵訳) 1999: 『自然の体系 I』、法政大学出版会。(D'Hollbach, Paul-Henri Thiry: *Système de la natura ou des lois du monde physique et du monde moral*. 1770)
- クロボトキン (三浦精一訳) 1970a: 「叛逆者の言葉」、『クロボトキン I』アナキズム叢書、三一書房。(Kropotkin, Pierre: *Paroles d'un Révolte*. Préface d'Elisée Reclus, 1885)
- クロボトキン (大沢正道訳) 1970b: 「相互扶助論」、『クロボトキン I』アナキズム叢書、三一書房。(Kropotkin, Peter: *Mutual Aid*, London, 1902)
- クロボトキン (長谷川進訳) 1970c: 「パンの略奪」、『クロボトキン II』アナキズム叢書、三一書房。(Kropotkin, Pierre: *La Conquête du pain*, Préface d'Elisée Reclus. Tresse & Stock, 1892)
- クロボトキン (磯部武郎訳) 1970: 「田園・工場・仕事場」、『クロボトキン II』アナキズム叢書、三一書房。(Kropotkin, Peter: *Fields, Factories and Workshop, or Industry combined with agriculture and braun work with manual work*. 1898)
- クロボトキン (高杉一郎訳) 1979: 『ある革命家の手記』上下、岩波文庫。(Kropotkin, Peter: *Memoirs of Revolutionist*. Boston, Houghton Mifflin, 1899)
- クロボトキン (勝田吉太郎訳) 1967: 「近代科学とアナキズム」、『ブルードン・バクーニン・クロボトキン』世界の名著 42、中央公論社。Kropotkin, Pierre: *La Science moderne et l'Anarchie*. Stock, 1913)
- M.E.L 研究所編 (岡崎次郎, 渡辺寛訳) 1960: 『マルクス年譜』、青木書店。(Institut Marksa-Engelsa-Lenina: OR: Karl Marx. Chronik seines Lebens in Einzeldaten. マルクス=エンゲル(大内兵衛・細川嘉六監訳) 1973-1974: マルクス=エンゲル全集 第31、32、34巻 大月書店。
- モーリー (大岩 誠訳) 1951: 『自然の法典』岩波文庫。(Morelly: *Code de la Nature, ou le Véritable*. 1755)
- ネットロウ (上杉聰彦訳) 1970: 「アナキズム小史」、『ネットラウ』アナキズム叢書、三一書房。(Nettlau, Max: *Breve storia dell' Anarchismo*, Edzioni L'Anarchisto Cesena, 1964)
- ルソー (今野一雄訳) 1962-64: 『エミール』岩波文庫 上・中・下。(Rousseau, Jean-Jacques: *Emile, ou de l'Education*. 1762)
- 猪木正道・勝田吉太郎 1967: 「アナキズム思想とその現代的意義」、『ブルードン・バクーニン・クロボトキン』世界の名著 42、中央公論社。 5-70.
- 梯 明秀 1980: 『全思想史過程の思想』創樹社。
- 勝田吉太郎 1967: 「バクーニン年譜」、『ブルードン・バクーニン・クロボトキン』世界の名著 42、中央公論社。 560-563.
- 渡辺孝次 1994: 『時計職人とマルクス第一インターナショナルにおける連合主義と集権主義』 同文館、366p.